

葉集を読む

松岡 隆子

身の裡に猥棲みあるや春の間

菊池 京子

広辞苑によると猥は、「中国で想像上の動物。形は熊に、鼻は象に、目は犀に、尾は牛に、脚は虎に似、毛は黒白の斑で、頭が小さく、人の悪夢を食うと伝え、その皮を敷いて寝ると邪気を避けるという」とある。レム睡眠中に見る夢は不吉な夢であったり、恐ろしい夢であったりすることがままある。私もかつて何度も怖い夢を見た記憶がある。人の意識下に潜んでいる何かがあるのかもしれない。この頃嫌な夢を見なくなったのは、猥でも棲んでいるのかもしれないと思っている菊池さん。窓外に抜がる春の闇が怪しげだ。

湯気の立つものから食べて霜の夜

河本 順

外はしんしんと霜の降る夜というのに、体中がふわっと温かくなるような読後感がこちよい。湯気の立つものから食べるという普通の何でもない事が、〈霜の夜〉という季語によつて詩に昇華される。初学の頃を降先生の下で確り学ばれた河本さんに身辺詠の佳吟が多いのは嬉しい。

雪吊のぐいと引き上ぐ松の枝

山口 一女

たまたま雪吊の作業を目にした山口さん、ここぞとばかりその一部始終を見つめる。松の幹近くに支柱を立てその先端から各枝へと放射線状に縄を張る。支柱の頂から縄を投げる

暗き葉のかぶさつてゐる寒椿
寒椿なんとみごとな落ちどころ

中谷 信子
椎名佐和子

寒椿とは冬の内から咲き始める早咲きの椿をいう。紅い椿にしても白い椿にしても、寒気を払うように凜然と咲く姿は人目を引く。春の椿に比べると花数も少な目で慎ましやかである。艶やかな深緑の葉に覆われるように咲いている様を中谷さんは〈暗き葉のかぶさつてゐる〉と描写し、手堅い写生句を成した。〈暗き葉〉は寒椿ならではの把握である。

二句目の椎名さんの寒椿は感情移入の句だが、さらりと言いつつ口語調の表現が活きている。もしかして、躊躇だるうか? としたら、これ以上の落ちどころはあるまい。〈なんと見事な落ちどころ〉とズバリと言つた直情に嫌味がないのは、感動の実感が純粹だからだろう。

因みに、園芸品種のなかに寒椿と呼ばれる八重咲のものがあるが、俳句で言う寒椿とは別である。